



第64回 上田市短詩型文学祭 入賞作品



今年の夏に作品を募集したところ、短歌、俳句、川柳、詩（ポエム）の4部門合わせて、1,380作品の応募をいただきました。
ご応募くださいました皆様、そして選者の先生方、ありがとうございました。
12月8日（日）には、各賞の入選者を迎え、上田文化会館ホールで表彰式を開催しました。入選された皆様、本当におめでとう
ございます。応募いただいた全作品を掲載した作品集を作成し、中央公民館ロビーに設置しております。ぜひご覧ください。

上田市長賞

短歌の部

歌詠めば下手とは言はずわが妻は「心が詠めていますよ」と言ふ

古安曾 甲田 隆登

〔評〕夫婦の温かい交流が感じられる。「心が詠めていますよ」の一言が嬉しい。

俳句の部

夫の霊好きな花火で迎えおり

中央西 安藤 洋子

〔評〕お盆の迎え火のことでしょう。単純明快な表現の中に、長い間共に過ごしたご主人への思いが伝わってきます。手花火のぱちぱち爆ぜる音も聞こえ、迎える喜びも感じられます。

川柳の部

牛歩でも握り締めてる老の夢

上丸子 尾上千鶴子

〔評〕物流、情報の高速化により変化の激しい時代にあつて、自らを見つめ足を地に着け着実に歩み、そして抱いた夢へ向かう力強い姿が浮かぶ、素晴らしい句です。

上田市教育委員会賞

短歌の部

木漏れ陽よ亡妻のこころが知りたくて温もり残る墓石に手を添う

築地 勝見 稔

〔評〕在りし日の妻の心に思いを馳せる。結句は「墓石に触る」とすると納まりが良いでしょう。

俳句の部

帰省子や指先おどる駅ピアノ

大屋 竹内 啓子

〔評〕帰省した学生が故郷の駅の構内に見つけたピアノを演奏している。自分が育った故郷へのなつかしさと嬉しさでその指先は踊るように弾んでいる。だれも共感できる景である。

川柳の部

人生の余白を埋める趣味一途

岩下 岩崎 キク

〔評〕人生百年時代を迎え、有意義に生き抜くために必要不可欠な力は、心身が健康で、常に何かを学び続ける姿勢を持ち、趣味や人的繋がりなどの個人が持つ無形資産を磨くことだという。それを趣味一筋に実践し、経験を積み、人生の余白をバラ色に染めるように励んでいる、作者の姿や想いが窺い知れることができる秀句です。

詩（ポエム）の部

夏の朝

浦野 大井 篤

広大な宇宙の片隅にある小さな美しい
青い星に届いている

世界が平和で人々が安心して生活できる
世の中になる事を切に願っている

毎日猛暑が続いている
昨夜は熱帯夜だった
四時過ぎに目が覚めた
パジャマが汗でぐっしりぬれている

宇宙の神秘さ 不思議さに心が震える
庭の緑木に朝露が光っている

茶を飲み 梅漬けを食べ
サア元氣を出して散歩に行こう

窓を開けて東の空を見ると
オリオン座が輝いている
その隣りにはシリユウスが青白く光っている
星の光は何百億年にも出て

ヒトはどこから来てどこへ行くのだろう
今地上では心無き専制者による
不条理で独善的な争いが続き
かけがえの無い多くの尊い命が失われている

〔評〕日々の猛暑の中で、作者が感じたものは宇宙のひかり。その不思議さ。神秘さ。美しさゆえに、平和を意識せずにいられないーそんな心のゆらぎが、表現されていて作品に、重厚さに、軽さが加わって読ませる詩となりました。後の二行が、現実に戻された朝のすがしさとして、伝わってきました。効果的でした。これからも詩を書いて下さいね。

上田市中央公民館長賞

短歌の部

独り身は寂しきよりもつまらぬと細く呟く友に寄り添ふ

諏訪形 有賀利枝子

〔評〕独り暮らしの友の気持ちを察しながら、寄り添う作者の姿勢が見える。「細く呟く」の言葉が適格。

俳句の部

甲子園砂つめる手に涙落ち

緑が丘 青木しずか

〔評〕連戦の末、試合に敗れ、甲子園の砂かき集めて袋につめる。その手に悔し涙を落とす姿は、正に青春の何にも替えがたい貴重な宝ものです。この句に季語はありませんが、内容から季節は十分伝わりますので、これでいいでしょう。

川柳の部

今日は二歩明日は三步を目指す杖

築地 勝見 稔

〔評〕体に不調があると、心が後ろ向きになりがちです。でも昨日より今日、今日より明日へと前向きな作者に共感を覚えます。二歩三步の具体性が良く効いています。

詩（ポエム）の部

子供の頃の思い出

中之条 石井紀代子

子供の頃、おやつ変りに
学校から帰ると
みそを空カンに入れ
畑へと忙ぐ
目的は
丸い丸いナスを食べることだ
そのナスをひき小僧で
トントんと、たたき
やわらかくする

ヘタを取り指で穴をあける
その中にみそをつっこむ
軽くやさしくもみほぐす
みそがナスの中身と交じり合っ
ておいしくなる
そのナスにかぶりつく
中から汁がチュート顔にかかる
丸かじり、ほどよい味だった
お腹をすいた我々には

〔評〕なかなか興味深い丸ナスの調理法ですね。おいしそう。私も作ってみたいになりました。信州ならではの材料で、おいしいひとときを、楽しんだ様子がほほえましかったです。後から六行目の前は一行アケルとよいかと思います。別の内容になるかと思いますが、そうしたテクニクで詩はよくありますので今後の参考にして下さい。



応募結果

一般	72人	138作品
小学生	691人	691作品
中学生	551人	551作品
合計	1,314人	1,380作品